

中部電力の不正行為事案を契機とした倫理的課題への向き合い方
—倫理委員会は何を考え、何に取り組んできたのか—

基準地震動策定に係る不正行為事案について、中部電力殿より事案の概要や再発防止に向けた取り組み状況をご紹介いただくとともに、倫理委員会よりこれまでの活動や検討内容について共有する。

そのうえで、本事案を踏まえ、倫理・安全・コンプライアンスの隙間や、不正・逸脱が表面化しにくい要因など、原子力に携わる関係者が倫理的によりよい行動を実践していくためには何が必要かについて議論する。

なお、中部電力の不正行為事案の具体的な発生原因や背景を特定・評価することを目的とするものではない。

日 時 : 2026 年 9 月 9 日 (水) 13:00~14:30

場 所 : 愛媛大学城北キャンパス C 会場 (共通講義棟 A 2F 共 A21)

出席者 : 194 名

座長 : 藤田 博喜 (倫理委員会委員、JAEA)

● 講演(1) なぜ起きたのか、なぜ防げなかったのか —技術者倫理の再考—

大場 恭子 (倫理委員会委員長、JAEA/長岡技科大)

- 一般的な倫理は人間関係をどうすればうまくいくか考える学問であるが、技術者倫理において一番大切な価値として出てくるのは「安全」であることが、まず一般的な倫理とは異なる。そうしたなか専門能力や人間性に基づきながら、未来を含む時代や地域によって違う安全の考え方や揺れ動くものの中でバランス感覚を持ち、自らの行動を設計して実際にその行動を実践することができることが求められる。
- 原子力学会の倫理規程は 1999 年から検討を始め、2001 年に制定されたものであるが、当時のアメリカの原子力学会の倫理規程に頼らず、自分たちで 1 から検討して作った誇らしい歴史がある。さらに憲章を噛み砕いた「行動の手引」を持っているのは日本の学協会としては初の取り組みで、他の学協会からの評価は高い。
- 倫理委員会では、関連する組織や個人による事案が起きたとき、漠然と「これおかしいよね、ダメだよね」という議論をするのではない。倫理規程に則ってなにが適切でなにが適切じゃないのか、何が足りなかったのか、自分たちの活動に足りないものは何なのかを議論している。
- 原子力技術というものは、一般の方にはなかなか理解してもらえない、国策とも結びついており、過去にトラブルはもちろん、大きな事故を起こした事実、また事故による影響が非常に大きいことから、安全性も非常に高いレベルが求められ、社会的から非常に厳しい目を向けられてしまう。

- ただし、この社会からの厳しい目を「安全装置」として捉えることが必要である。理不尽と感じる人とは、この厳しい目が判断を誤りバランス感覚を狂わせてしまうきっかけとなる。厳しい目を「安全装置」として捉えて、応え、考えることが、組織の問題として全体で防いでいく取り組みにつながる。
- 自分あるいは自組織のメンバーは、大丈夫、迷わない、間違わないと無意識に思い込んでしまっている方が少なからずいるのではないかと思われる。だが、アダムとイブが神様から絶対食べてはいけないと言われていた果実を食べて楽園から追放されたように、人は本来弱いものである。
- 人は間違えるし弱いものであるということを前提に、みんなで助け合ったりいい文化を作り、その弱さを補い合う仕組みを作っていくことが倫理の基本である。倫理はものが起きた後に注目されるが、本当に必要なのは倫理事案が起きる前であって、それによって事案を防ぐことである。みんなで倫理、そして組織文化を磨いて高めていきたい。

● 講演(2) 基準地震動策定に係る不適切事案について

大塚 温久（中部電力）

- 浜岡原子力発電所の基準地震動策定に関わる不適切事案や、その後に公表した NuRO における書類の書き換え事案は、原子力事業者としての社会的信頼を大きく損なう事案であり、社会の信用があって初めて成り立つ安全や技術への取り組みに水を差してしまったと重く受け止めている。
- 本事案に関して社外の委員を中心とした調査委員会を立ち上げて調査中であり、3月に国へ提出した報告書は中間段階の扱いであるため、調査報告書が出た段階で現在取り組んでいる対策が十分であるかを評価し、根本原因分析を行って原子力規制委員会へ最終報告書を提出する。
- 審査会合の説明と異なり 20 組のセットを 100 組ほど作って代表波を設定する「方法 1」や残差が最小ではない波を選ぶ「方法 2」などの不適切なやり方を遅くとも 2012 年や 2018 年以降に行っており、さらに 2023 年 5 月に規制庁から調査依頼が来た後も 11 月頃まで波の組み替え作業やデータを揃えるなど、やってしまったことを正直に伝える誠実性ができていなかった。
- 本来であれば後から何をやったか確認できるトレーサビリティを持った個別業務計画を立てるべきであったが、それができておらず記録に残らなかったことや、地震動評価という専門性が極めて高い領域を数人の限られた人数で実施していたため牽制が効きにくかった。
- 審査資料をチェックするライン外専門家の権限やコメントの対処記録が文書化されていなかったことや、原子力土建部における品質保証体制が 2 名のみと非常に脆弱であったことが、不正の機会を作ってしまう原因になった。
- 原子力土建部の内部では 2018 年以降に「審査の説明と違うから正々堂々と説明すべき」という意見が複数回あったが、それを無視できてしまう状況があり、山本七平の著書（空気の研究）にあるような日本人が押されてしまう「空気」や集団思考（集団浅慮）に陥って自分たちを正当化してしまう傾向に打ち勝つ仕組みがなかった。

- 調査委員会の最終報告書を待たず悪いところが見えた瞬間からやるという方針のもと、コンプライアンス・業務プロセス・技術者倫理の3ステップによる全員への教育・研修を順次実施するとともに、外部の専門家目線を入れる仕組みの検討、若手主導による独自の倫理規程の策定、外部コンサルによる業務計画チェック、全社一括管理の品質保証部の新設など、ルールや仕組みの強化を進めている。
- 中部電力の原子力は風通しがよく仲が良かったため仕事がしやすいとアピールしインターン生などもそう感じていたが、実際には問題を抱えたり言い出せなかった人がいるため、ただ「言え」というのではなく、言い出す勇気を持てる組織風土をどう作っていくかが課題である。

● 講演(3) 基準地震動策定に係る不正行為事案を踏まえた倫理委員会の対応

神谷 昌伸（倫理委員会幹事、原電）

- 倫理規程は、会員が専門家としての倫理的行動はどういうものなのかということを考える機会を提供し、ジレンマやトリレンマのような場面で適切な解を見つけることに供するもの。
- 中部電力の事案公表を受け、倫理委員会は1月にクイックな声明を出し、5月には原子力に関わる全ての方々への提言と、当事者・関係者への提言という2つの大きな柱からなる提言を発信した。
- 原子力に携わるすべての方々への提言では、(1)技術者倫理の基本の再確認、(2)真実性原則、誠実性・正直性原則の観点、(3)専門職原則、有能性原則の観点、(4)組織文化の醸成の観点の4つで整理している。
- 関係者への提言では、不正事案が起きる時は技術的な要求事項がそもそも守れない要求だったり整備されていなかったりすることがあるため、関連する学協会の責任として、本事案に関連した技術的事項について説明性や透明性を確保するための検討を速やかに進めるべきだと本会理事会へ投げかけた。
- 倫理委員会の活動として倫理について考える場を継続的に提供していくことを継続する。また、学会での活動は、所属する組織の枠を超えてお互い高め合うことに意義があり、学会での活動を職場にフィードバックすることによって正のスパイラルが期待できる。倫理規程がより日常的な存在になるような形で検討を進めていきたいと考えている。

● 総合討論

<指定討論者：名古屋大学 山本章夫教授（原子力安全部会部会長、標準委員会委員長）>

- 中部電力の事案は安全文化や技術者倫理の重要性を改めて考え直すきっかけである。このような事案は、組織の中で安全文化の弱いところを突破されて発生する。従って、こうした事案は今後も繰り返し起こりえると考えるのが自然である。
- 倫理感とは、そもそも今回の様な事案の発生を抑止するという意味で、その重要性が再確認された。一方、倫理的な人は不正をしないというモデルには限界があり、倫理規程は防止、安全文化の問いかける姿勢は検知、組織が正しい態度を取るという緩和、さらに回復と学習も含めた深層防衛的な対応を考えていく必要がある。

- 中部事案では緩和に失敗してシビアアクシデントになったと捉えられ、今後は深層防護的な対応とともに、安全が保たれるように組織がうまくやっているという Safety II の考え方も持ち込んでくる必要がある。

<大場氏>

- かつては、企業などへ技術者倫理の講演に行く際「俺たちが倫理的じゃないっていうのか」と構えられた時代もあった。今はだいぶ変わったが、しかしながらまだ前提に、自分や自組織は大丈夫だと思っている人がまだ多いのではないか。
- 倫理委員会がこれまで伝えきれていなかった部分を補うためにも、技術者倫理や安全文化を深層防護型のような形で捉え直して伝えていくという意見は非常に良いアイデアであると感じる。
- 今回の事案は、非常に専門性が高く安全を一番分かっている当事者が本当に悪いと思ってやっていたのかという点はとても重要なポイントである。今後出てくる報告書を踏まえて活動し、それを自分ごととして、会場や学会員、その周囲の人々へ伝えていくことが大切。

<大塚氏>

- 組織の中で同調主義や集団思考に陥りやすく異論を排除しない環境づくりに悩んでいる。反論が出ない提案は認めず再審議させたジェネラル・モーターズのスローン CEO のように、専門性が高く「NO」と言いにくい分野でどう打ち破るかが大事。
- 不正の三原則における正当化のモードに一度入ると抜け出せず、人間は不安定な状態を安定させようと無意識に正当化してしまうため、社内の安全文化アンケートなどでもこうした不正を検知することの難しさを感じている。
- 人間が正当化へ傾く気持ちに抗うための仕組みとして倫理規程をベースにした問いかけなどが考えられるが、山本先生から提示された深層防護的な発想という新しい切り口が、まさにその仕組みづくりの大きなヒントになると思った。

<山本氏>

- 今年6月の原子力安全部会における1F事故から15年の振り返りでは、発電所のハードウェアが非常に改善された一方で、日本の文化的な国の特性を起因にする、さっきの「NO」を「NO」と言えないところなどが話題になった。
- 中部電力の事案のほかにも、国内では同様の事案が数件発生しており一筋縄ではいかない問題だが、これをやれば解決するという万能薬のようなものはなく、今後も引き続き考えていく必要がある。

<神谷氏>

- 2017年以降に様々なメーカーで起きた多くの品質不正について、当時倫理委員会で共通する背後要因を分析しており、今回の中部電力の調査委員会報告書等が出てきた後にそれと照らし合わせ、共通的な要因について分析することを考えている。

<大場氏>

- 制度化と言ったが、やはり違う目を入れるということ。一つは、自分で第三者的な視点で確認できるツールである倫理規程の活用である他方、専門性の高い原子力分野でどう

第三者を入れていくかも課題であり、そこに上下関係の影響しないようにしなければならない。

- OECD/NEA が日本における国特有の安全文化をまとめているが、この項目を、組織が自分たちの安全文化のリスクと捉えられるかが、非常に重要。

<会場参加者>

- 間違いを大ごとになる前の傷が浅いうちに早く検出し、深刻度合いに応じて早めに対策するような構成やアプローチの仕方も考えられるが、そういったことは倫理委員会や倫理規程で議論されているか。

<神谷氏>

- 組織文化の醸成において、具体的な仕組み自体はそれぞれの組織の中で考えるものであるが、不正を発生させず、発生したら早く見つけ、見つかったら早く改善するというアプローチは非常に重要。
- その際、禁止事項を並べるのではなく、ポジティブにみんなが行動化できる環境に資することが必要ではないか。電力会社の「10 トレイツ」にあるような相互に尊重する、コミュニケーション、問いかける姿勢など、仕組みの中で実効的に機能させていくことに尽きると思う。

<会場参加者>

- 倫理はバランスよく考える必要があるという大場委員長の発言を踏まえ、これまでの倫理委員会としての規程改定や活動全体が間違っていた可能性はないか。
- 1F 事故のあとに他の要素とバランスをとろうとするような、いわば頭の体操をする姿勢を我々は失ってしまっていないか、今日のお話を聞いていて怖くなった。

<大場氏>

- 1F 事故の後は当時の倫理規程と照らし合わせて明確な違反が出なかったため提言は出していないが、行動の手引においては、一つのものだけに教条的に従うのではなく全体を見てほしいということをお伝えしている。
- 倫理規程そのものはどれか一つだけを守ればいいのではなく全てに目配りができるように常に色々な視点で議論した結果として改定しているため、これまでの活動が間違っていたとは感じていない。

<会場参加者>

- 1F 事故の後、一生懸命に倫理教育をやってきたが、結果として今回の事案が起きている。今回、どこか他人事に聞こえてしまい残念な部分がある。自戒を込めて言うと、もっと前に学協会の活動の中で制度化することはできなかったのかと思った。
- 安全が重要だから倫理的行動が必要だと短絡的に受け止められ、今回の事案は技術的な安全性に強い影響を与えないなら他の価値より軽視してもよいと判断されていたのだとしたら、これまでの倫理教育がかえって「悪い学び」になっていたのではないかと危惧している。

<大場氏>

- 技術者倫理として安全は最も大切だが、もし「安全さえ守っていれば他の価値は軽視してよい」と受け止められているならばそれは大きな間違いであり、倫理委員会が伝えたいメッセージではない。
- 自分の判断が違う立場や専門の人から見てズレているかもしれないと考えるツールとして倫理があり、私自身がいつも自分の判断に不安を持つように、そうした危機感をより多くの方に持ってもらうことが大切。
- 事案が起きると倫理的に問題だったと言われるが、何も起きていない状態は評価されず、そこに倫理問題があっても早期発見や組織の文化でうまくまとめられているだけかもしれない。事案が起きたとき「やっぱり倫理が問題だった」とする時に短絡的な分析には違和感を感じる。

<山本氏>

- 安全と倫理が非常に密接に結びついていて、安全に影響を与えないならば倫理的な行動から少し外れてもいいというようなメッセージを発していないか、そういうことでよかったか。

<会場参加者>

- そこまでは言っていないが、安全と倫理が密接に結びつき過ぎてしまった結果として、他の価値とのバランスが取れているか不安に思うことを疎かにしてしまったのではないか、ということ。

<大場氏>

- 改めて委員会の方でも検討していきたい。

<会場参加者>

- 第三者の視点からこのセッションに興味を持って来たが、何が問題なのかがよく分からない状態で困っている。最初に宣言したやり方と違うやり方をした理由として、楽をしたかった（不正）、変えたやり方の方がいいと思った、最初のやり方が実現不可能だった、という3つのパターンが考えられる。
- この3つのどれに該当するかによってここで議論する内容が全く変わってくるため、それを明確にしないまま1時間半を使うのはもったいないと感じた。
- 第三者的な視点からは、原因や背景が分からない状態のままで悪い悪いと袋叩きにするのはいじめのように見えるため、少しセーブした方がいいと感じた。

<大場氏>

- なぜ違うやり方をしたのかという理由は、記憶の書き換えを防ぐためにも中部電力の社内でも調査ができない状況にあり、本当に第三者委員会の報告書を待たないと分からない状況。

● 閉会の挨拶 原子力学会理事・倫理委員会委員 溝上伸也（東電）

- 大変な天候の中で来ていただいた大塚さんをはじめ、講演者の皆さん、指定討論者の山本先生、そして会場の皆さま方、活発な議論をいただきましてどうもありがとうございました。

以 上